

〔特別寄稿〕

大地の母 (Earth Mother)

松 本 守*

大地, 大地の神性, 大母神については, 多くの神話のなかで伝承されている。大地は永遠であり, 万物はそこから生まれ, そこへ帰っていくことから崇拜され, 信仰の対象とされてきた。地母神の多産性は, 必然的に大地の母性の観念へと結びつく。やがて豊饒と女性の多産性は, あらゆる農耕社会の基本的観念となる。更に女性は, 宇宙的豊饒性の源と考えられている大地や月と結びついている。「大地の母」(earth mother)の範疇に入る女性は『八月の月』(Light in August, 1960)に登場するリーナ・グローヴ(Lena Grove), 『野生の棕櫚』(The Wild Palms, 1970)に登場する妊婦, 『村』(The Hamlet, 1940), 『町』(The Town, 1957), 『館』(The Mansion, 1959)などの「スノーブス」三部作に登場するユーラ・ヴァーナー(Eula Varner)とその娘リンド・スノーブス(Linda Snopes), 『死の床に横たわりて』(As I Lay Dying)に登場するデューイー・デル(Dewey Dell)などが代表的な例である。「大地の母」の範疇に入る女性は, 母なる大地の化身とされ, 大地の持つ豊饒さと持続性の恩恵を授かっている。大地に神を見る時, 女性の直観力が神格化される。『八月の光』はジョウ・クリスマス(Joe Christmas)の物語, ゲール・ハイタワー(Gail Hightower)牧師の物語, リーナ・グローヴとバイロン・バンチ(Byron Bunch)の物語の三つから成り立っているが, 文明を体現しているクリスマスと自然を体現しているリーナの二人が大きな柱となっている。リーナ・グローヴという名前そのものが, 自然と大地の生命力を象徴している。エドモンド・ボルプは, 「リーナは異教の豊饒の女神とキリスト教の聖

母マリアのイメージを兼ね備えた女性」であると絶賛している。多くの批評家が指摘している如く, リーナはまぎれもなく, 偉大な大地の母である。

フォークナーは自身もリーナについて, 次のように言っている。『八月の光』は, リーナ・グローヴから生まれました。何も持たず, 妊娠し, 恋人を捜しに行こうと決心している若い娘の姿から生まれました。それは女性に対する賛美, 女性の勇気と忍耐強さに対する賛美から生まれました。物語が展開するにつれて, 私はだんだん他の方向へ深入りしましたが, それは主としてリーナ・グローヴの物語です。

『八月の光』の題名はともかくとして, アルフレッド・ケイジンが指摘しているように, 「光」と「暗闇」の象徴性は小説全体に利用されている。まぎれもなく, リーナ・グローヴは八月における「光」である。つまり, 「彼女は生と光を与えるもの」である。豊饒さと持続性という観点からみて, 『八月の月』の物語が, 「私はアラバマからやってきた。ずいぶん遠くにきたものだ。はるばるアラバマから歩いてきた。ずいぶん遠くにきたものだ。」というリーナの言葉で始まり, 「まあ, まあ。人間って, ずいぶん遠くまでこられるものだよ。アラバマを出てからまだ二ヶ月しかないのに, もうテネシーにまできたわ。」とリーナの言葉で終わっているのは象徴的である。

リーナは田舎の寒村に住んでいたが, 十二歳になった年の夏に父母が相次いで死んだので, 兄のマッキンレー(Mckinley)と一緒に暮らすことになる。兄は小さな家に住んでいたため, リーナの部屋として, 家の裏手の差しかけ小屋があてられた。兄はリーナより

* 藍野大学看護学科教授

二十歳も年上で、製材所で働いており、兄嫁は多産であったので、リーナが家事と子供たちの世話いっさいを引き受けている。彼女が二十歳になった時、ルーカス・バーチ (Lucas Burch) という男と関係して妊娠した。ルーカスはいいかげんな男であったので、勝手な理由をつけてその土地から出て行き、行方をくらましてしまう。兄はリーナのことを「売春婦」だといって責めたのだが、リーナは兄の情け容赦ない言葉にまったく動じず、「あの人はきっとだれかに頼んでわたしを迎えにくるわ。迎えをよこすとちゃんと言ったのよ。」と無邪気に繰り返している。リーナは男の言葉を信じて迎えにくるのを待ったが、出産の時期が近づいてきたので、夜中に窓から飛び出す。それも棕櫚の葉の扇と兄のお古の靴と大型のハンカチに包んだわずかばかりの身のまわり品だけを持って、出奔したのである。彼女はほとんど無一文で男を尋ねる旅に出たので、通りすがりの馬車に次々に乗せてもらい、旅を続けることになる。途中リーナは農夫アームスティッド (Armstid) の馬車に乗せてもらい、一晩とめてもらう。そこでアームスティッドの女房マーサ (Martha) の親切を受ける。最初は無愛想であったが、根が善良なマーサは、リーナの心情にほだされて、夜中に貯金箱を叩き割り、備えていた卵の代金をすべてリーナにやるようにアームスティッドに依頼する。翌朝アームスティッドは、リーナをジェファソンまでの馬車の便があるヴァーナーの店まで連れて行く。

女性は教会で結婚式をあげ、子供を産み、家庭をまもるのが社会の習慣であるが、リーナはまったく無頓着である。アームスティッド夫人には、リーナは墮落した女であり、ヴァーナーの店にいる男たちには憐憫と軽蔑の対象になっている。リーナと出会う人々にとって、彼女が結婚しないで妊娠しているのが問題なのである。それでもなおリーナが親切を受けるのは、オルガ・ヴィッカリの言うように、「自然のさし迫った要請が社会の習慣に先行」したからである。

リーナが捜している男に対して、アームスティッドが懸念の表情をして尋ねると、彼女は自信に満ちた表情で、きっと見つかると思うわ。そんなに難しいことはないと思っています。あの人はきっと、大勢の人が集まるところにいると思うわ。みんなが笑ったり、冗談を言ったりするところにいるにちがいないの。ひとを笑わせるのがいつも上手だったんですもの」と答えている。

さらにマーサの心配に対しても、同じように自信に満ちた態度で、「赤ん坊が生まれるときは、家族はみ

んないっしょにいななければいけないと思っています。とくに最初のときは。神様がそういうふうにしてくださると思います。」と答えている。マーサもつられて、「神様がそういうふうにしてくださらなければいけないとわたしも思うわ。」と力強く応じている。リーナはヴァーナーの店の前で、ジェファソンに行く馬車に乗せてもらって、さらに旅を続ける。馬車がジェファソンの見える丘までさしかかると、彼女は「うちを出てからまだ四週間にしかならないのに、もうジェファソンにまで来たわ。まあ、まあ。人間ってずいぶん遠くまでいけるものだわ。」と呟く。彼女はお腹の胎児の生命を感じながら、悠然と旅を続けている。

リーナは「生」のイメージを彷彿させる典型的な女性である。彼女は素朴で純真無垢な田舎娘であるが、彼女の言動は深く豊かな人間性に根ざしているのだから、出会う人々の心をとらえ、「生」の方向へ導く。アルフレッド・ケイジンが指摘しているように、「アメリカにあっては紛れもなく不名誉である貧困が、南部文学では、自然人ハックルベリー・フィン (Huckleberry Finn) や大地の母リーナ・グローヴのように主役」を演じている。南部文学では、「自然」が重要な位置を占め、なかでもリーナ・グローヴは自然を体現した女性である。

バイロンは三十過ぎの風采のあがらない独身男で、土曜の午後は残業し、日曜は田舎の教会へ出かけて行って、聖歌隊の指揮をとっている。七年間同じ規則正しい生活を続けている。そしてある土曜日の午後、仲間の連中が火事場見物に出かけた後、ひょっこりとリーナが彼を尋ねてくる。生真面目なバイロンは、すぐさまリーナに一目惚れし、多弁になって、火事がバーデン邸だという話から、工場をやめた無気味なクリスマスと陽気なブラウン (Brown) のことなどを話し出す。リーナは直感的に陽気なブラウンが、自分の尋ねる男バーチだと感じとる。その後リーナが夜中に産気づくと、夜明けを待ってバイロンは馬でハイタワーの家へ乗りつけ、ぐっすり眠っているハイタワーを起こして、黒人女がお産のとき、あなたが使ったあの本を持って小屋にいてくれるように依頼する。

バイロンが医者連れて小屋に戻ったときには、リーナの出産はハイタワーの手によって無事に終わっていた。リーナのお産は、バイロンとハイタワーに決定的な影響を与えている。

ハイタワーは念願かなって、長老派教会の牧師として、祖父の終焉の地であるジェファソンの教会に赴任することができた。彼は説教壇の上においてさえ、宗

教と疾駆する馬から射落とされた祖父の幻影とを区別することが出来なかったため、会衆を当惑させ憤慨させている。また先祖の亡霊にとりつかれて、家庭生活をないがしろにしたため、妻を不品行に追いやり、自殺させている。彼は教会を追われた後は、現実の社会から遊離して、生ける屍のような暮らしをしている。

リーナが他の人々を再生させる能力は、アームスティッド夫妻やパイロン・バンチなどに発揮されたが、なかでもハイタワー牧師の場合は極立っている。ハイタワーは過去の世界に埋没して、生ける屍のごとく生きてきたが、パイロンに頼まれてリーナのお産を助けてやることによって、責任ある大人として社会参加をしている。フォークナーの作品に登場する男性は、女性の妊娠にとりわけ感動し、女性の魅力を感じるようである。リーナの子供を自分の手でとりあげた後のハイタワーは、勝利感と充実感にひたっている。ハイタワーは、今までに感じたことのない宗教的な境地に達している。二十五年間、怠惰で無気力な生活をおくってきたが、今の自分の言動は、確かな目的を持った男のようであると実感している。その後クリスマスの祖母から、クリスマスの犯行の夜についてのアリバイを頼まれると、即座に断りきれずに苦悶している。彼は遁走してきたクリスマスになぐり倒され、血だらけになりながらも、そのあとを追って家の中に乱入してきた町の連中に向かって、虚偽のアリバイをしようとした。それはかなわぬまでも、虐げられた者のために闘おうとする人間の善意の言動である。ハイタワーの孤独への願望は、過去の世界に埋没して暮らしたいという願望からきている。彼は南北戦争前の南部は、ロマンティックで活気に満ちていたという幻想を抱いている。そのため彼は、「自分の生涯は生まれる前から終わっている」という固定観念にとらわれている。その背景には現実には解決不可能な問題に満ちており、それと正面から対決することを回避したいという気持ちがある。しかしリーナによって、現実社会の生活の場に引き出されてからは、人間は社会の一員となって、自分の行動ばかりでなく、他の人々の行動に対しても責任を担わなければならないと考えるようになる。

ハイタワーは、リーナの神々しいまでに光り輝いている身体をまのあたりにして、豊饒な未来を予感している。

リーナは形骸化した社会の慣習や宗教や道徳には、まったくとらわれていない。彼女は子供の父親でさえ、誰であるかには関心がないように思われる。まるで子供は、自然の摂理に従うことによって、自然がはぐく

んでくれたかのように振る舞っている。彼女は予想される母親になることに意義を見出し、生まれてくる子供を育てることに生きがいを見出しているように思われる。フォークナーはリーナが処女ではなく、結婚しないで子供を産んだという事実にも拘らず、処女である若い女性が持つ静穏で純真無垢な性格を授けているのは意義深い。フォークナーは、処女性の問題ではなく、自然の生殖作用にしたがって充実した生活を営む女性を理想像にしている。

リーナとパイロンの物語は、対照することによって、ハイタワーやクリスマスやバーデンなどの物語に光を当てるという意味で、非常に重要な役割を果たしている。リーナが現れるまでのパイロンは、時間の観念にとらわれて、画一的な生活をしてきた。彼は七年間、製材工場で週六日働き、土曜は残業し、日曜日には聖歌隊の指揮をとるために、遠く離れた田舎の教会に向かっている。その結果、彼は社会から孤立した生活を強いられた。彼が交際している相手は、同じように社会から孤立して暮らしているハイタワー牧師だけである。ハイタワー牧師の語るところによれば、パイロンは「静かで頑固で禁欲的で、長いあいだ、砂あらしの吹きすさぶ空漠としたところに住んできた隠者のような顔」をしている。パイロンはリーナに献身的に仕えることによって、単調で無意味な自分自身だけの世界から、人を愛し自分の行動に責任を持つ世界の生活に戻る。

リーナの子供の父親バーチは、ブラウンと変名してジェファソンの町で密造酒を売っていたが、クリスマスの殺人に関与したことから、留置場に入れられていた。彼は留置場から呼び出され、副保安官によってリーナと子供が寝ている小屋に連れて行かれる。そこにリーナがいるのに気がついて、彼は慌てふためきながら、口から出まかせな言い訳をする。一方リーナは冷静で穏やかな声で、「こっちへきて」と赤ちゃんをみせようとするが、彼はさらに動揺して、「そとに男がいる。表でおれを待ち伏せしているんだ」と口実をつくって、窓から姿を消す。リーナは一度大きなため息をついて、「また、おきて出かけなければならないわ」と独り言を呟く。リーナの落ち着きは、すでにパイロンの正体を見ぬいていることからきている。

家具修理兼販売人の口を通して語られるリーナとパイロンの道行きのシーンは、ほほえましく、ユーモラスで、牧歌的である。パイロンはリーナを愛しているにも拘らず、それをどのように表現したらよいかかわからず、思い悩んでいる。ときには思いきった行動に

出るが、その都度リーナの落ち着きと素朴さにかわされてしまう。最後の場面でもバイロンは、猫のような足どりでリーナが寝ているトラックに忍び込むが、リーナはまるで子供を宥めるような調子で、「あら、パンチさん。こまるわね。赤ちゃんも目をさますところだったじゃないの」「むこうへ行って、もうおやすみなさいよ。寝ておかないと、明日は遠い道があるんですから」と言って追い返す。バイロンは森の中をめくらめっぽうに突き進んで、姿をくらましてしまう。リチャード・チェイスの言うごとく、「リーナはいくぶん牛のような大地の母であり、男性をとまどわせ、魅了し、最後には打ち負かしてしまう、フォークナーお気に入りの女性らしいすべての性質」をそなえている。家具修理兼販売人は、リーナをどうしたらよいのかわからず途方に暮れるが、リーナの落ち着いた態度を見て、彼女の生命力の強さに驚く。

リーナは世間から見れば、クリスマスと同じようにアウトサイダーであるが、彼女は自分自身の境遇にはまったく無頓着である。彼女にとって人生は、驚くべき連続であり、生きる喜びに満ちている。彼女は人々に出会うことを楽しみにしており、彼等の親切に新鮮な驚きを示している。家具修理兼販売人は、リーナの将来を予想して次のように言っている。

リーナは素朴で、忍耐強く、生命力にあふれて、あらゆるものを包みこむ力をそなえている。すべてのものに対するリーナの受容は、本能的な信念と楽観主義から生まれている。リーナが捜し求める夫の件で、アームステッドの女房は、リーナの世間知らずと人のよさに軽蔑の表情をうかべて問いかけるのに対して、リーナは静かな落ち着いた態度で、「赤んぼうが生まれるときには、家族はみんないっしょにいないかならないと思います。とくに最初の子のときは。神さまがそういうふうにしてくださいと思います」と答えている。リーナは妊娠することによって自然の摂理と一体となっている。彼女がお腹の赤んぼうの動きを感じる時、彼女の身体が自然との親密さを感じている。フォークナーの見解によれば、女性が大地に根ざした生き方をすれば、その女性は豊饒さや忍耐強さばかりでなく、本能的に真実に近づく力をも授かる。

ケネス・リチャードソンは、フォークナーの小説における理想的な母親像を次の三つに分類している。第一は、『八月の光』に登場するリーナ・グローヴや『野生の棕櫚』に登場する妊婦に代表される「大地の母」に属する女性である。第二は、『響きと怒り』に登場するディルシーに代表される「育ての親」である。

第三は、『サートリス』に登場するヴァージニア・デュ・プレ (Virginia Du Pre) や『征服されざる人びと』 (The Unvanquished, 1938) に登場するローザ・ミラード (Rosa Millard) などに代表される祖母である。注目すべきことは、「大地の母」に属する女性が自然の営みに従って子供を産み、「育ての親」が子供を慈しみ育て、最後は、「おばあちゃん」が子供に真実を教えこむといった具合に、母親の役割が分担されていることである。彼女たちに共通した特徴は、子供や家族を愛し、家庭の維持のために献身的に尽くすことである。彼女たちは勇気、忍耐、誠実など生得の資質をそなえていて、自然と調和して生きることが出来る。なかでも「大地の母」に属する女性たちは、多産で、自己犠牲的で、自ら進んで苦難に堪え、家族の維持と世話に献身している。彼女たちの生き方は、物事の自然な秩序に対する楽観的な信頼である。リーナの信念は、人間の持つ心の誠実さを信じていることからきている。「大地の母」に属する女性たちは、人間性に根ざした永遠の真実を持ち続けることによって、社会に生の息吹を与えている。彼女たちは人生を理知的に処理する能力に欠けているけど、現実にも根ざした生活の知恵によって、人生の様々な困難を乗り切ることが出来る。彼女たちはモダニズムの内包する悪徳、欺瞞や卑怯や軽薄や傲慢などにそまらない。フォークナーの小説の世界では、男性の主人公たちは、南部の宗教や人種差別や道徳などの呪縛に萎縮して、良心と直観力を無力化してしまっているが、「大地の母」に属する女性たちは、大地の持つ豊饒さと持続性に恵まれていて、あらゆる固定観念や強迫観念にとらわれずに、自然の最も深い目的と静かに調和して生きている。彼女たちは、「大地の女神」の化身として、人類の保存に本質的に必要な女性である。

参考文献

- 1) Volpe EL. A Reader's Guide to William Faulkner. London: Thames and Hudson; 1964.
- 2) Bedell GC. Kierkegaard and Faulkner -modalities of existence-. Baton Rouge: Louisiana State University Press; 1972.
- 3) Gwynn FL, Blotner JL eds. Faulkner in the university -class conferences at the University of Virginia 1957-1958-. Charlottesville: University of Virginia Press; 1959.
- 4) Faulkner W. Light in August. London: Chatto & Windus; 1960.
- 5) Vickery OW. The novels of William Faulkner -a critical interpretation-. Baton Rouge:

- Louisiana State University Press; 1964.
- 6) Kazin A. The stillness of Light in August, In: Hoffman FJ, Vickery OW eds. William Faulkner —three decades of criticism—. East Lansing: Michigan State University Press; 1960.
 - 7) Chase R. Light in August. In: Schmitter DM ed. William Faulkner —a collection of criticism— New York: McGraw-Hill; 1973.
 - 8) Backman M. Faulkner —the major years: a critical study— Bloomington: Indiana University Press; 1966. p.132.
 - 9) Howe I. William Faulkner: a critical study. Chicago: University of Chicago Press; 1951. p. 240.
 - 10) Malin I. William Faulkner: an interpretation. New York: Gordian Press; 1972. p.45.
 - 11) Brooks C. William Faulkner: the Yoknapatawpha country Baton Rouge: Louisiana State University Press; 1963.
 - 12) Page SR. Faulkner's Women —characterization and meaning—. De Land, Fla.: Everett/Edwards; 1972.
- Richardson KE. Force and faith in the novels of William Faulkner. The Hauge: Mouton; 1967.